

絵馬を読む

和船時代の土佐カツオー一本釣り漁をめぐって

Analysis of Votive Pictures :
A Study of Pole-and-line Bonito Fishing in Tosa
in the Period of Japanese-style Wooden Vessels

松田睦彦

MATSUDA Mutsuhiko

はじめに

①研究史の整理と絵馬の活用

②近世の土佐カツオー一本釣り漁と絵馬

③絵馬を読む

おわりに

【論文要旨】

小稿はカツオー一本釣り漁の様子を描いて社寺に奉納された絵馬, すなわち「カツオー一本釣り絵馬」を分析することにより, 和船時代のカツオー一本釣り漁の実態を明らかにすることを目的としている。文献資料に制約があり, また聞き取り調査に関してもその限界が明らかな対象に対して, 画像資料の果たす役割は大きい。とくに生業に関する絵馬は, それが奉納者の生業の繁栄を祈願したものであるがゆえに, 実景・実情を反映したものが多くと考えられる。したがって, 形式化や誇張, あるいは祝祭的表現などに留意しながらも, 絵馬は資料として積極的に活用されるべきである。

高知県内には, 他の地域に比べて多くのカツオー一本釣り絵馬が残されている。これらの絵馬は, 土佐藩による漁業政策を後ろ盾とした近世におけるカツオー一本釣り漁の発展を背景に, 鯉節の流通をとおして経済的結びつきの強かった大坂にその起源があると考えられる。その痕跡は, カツオー一本釣り絵馬が, 大坂を中心として生産・販売された船絵馬の構図を受け継いでいることに見て取れる。

小稿では, 高知県幡多郡黒潮町上川口の天満宮に残された慶応元(1865)年奉納のカツオー一本釣り絵馬を素材とし, 絵馬を聞き取り調査で得られた情報を裏づける担保として用いるのではなく, 絵馬そのものを読み込む作業をとおして和船時代のカツオー一本釣り漁の漁場や漁撈具, 労働組織, 服装, 身体技法, そして俗信等について考察した。明らかにし得た範囲は絵馬に描かれた情報を大きく超えるものではないが, 描かれた景観に関する地元の人びとの認識や漁師の技法, あるいは服装など, 文献調査やインタビュー調査を中心としたこれまでの調査から一歩踏み出す成果も得ることができた。こうした成果は, 一方で絵馬そのものの史料価値を裏づけるものでもある。

【キーワード】 絵馬, カツオー一本釣り, 木造和船

はじめに

国立歴史民俗博物館第4展示室（民俗）では、全長約10m、幅約2.5mのカツオ一本釣り漁船が圧倒的な存在感を示している（写真1）。昭和59（1984）年12月に土佐清水市で完成し、進水式を行なった上で歴博に収められたこの「龍王丸」はコジョク⁽¹⁾と呼ばれる和船である。漁場が近いことから紀州船と比較して小型であり、荒海での安定性を考慮してズングリとした形をしている。カツオ船は明治末から動力化・洋型化・大型化が進展したため、「龍王丸」の建造当時まで残った和船のカツオ船は皆無であり、板図なども残されていなかった。しかし、土佐清水の民俗研究家、中山進氏が詳細な史料の検討を行ない、また、昭和10（1935）年頃に実際にコジョクを手掛けたという船大工、宮本国松氏の指導のもとで酒井賢輔氏が建造にあたり、展示スペースの関係から10分の9へとスケールが縮小されたものの、カツオ船「龍王丸」は無事に復元されたのであった〔高桑1985〕。荒波にもまれる苛酷な労働に用いられた木造和船は傷みが激しく、また、漁船そのものが常に技術革新の波にさらされることを考えると、現存するコジョクが皆無なのも無理はない。それだけに、歴博に展示される「龍王丸」の資料的価値は高い。

しかし、「龍王丸」のような木造和船を用いて実際にどのように漁が行なわれていたのか、その具体的な様相については明らかになっていない部分が多い。

そこで、小稿では幕末から明治中期にかけて高知県沿岸部で盛んに奉納された「カツオ一本釣り絵馬」を読み解くことで、和船時代のカツオ一本釣り漁の復元を試みたい。もちろん、絵馬に描かれた内容を史料として取り上げるには一定の留保が必要である。縮尺の矛盾や大げさな表現、定型化した画面構成など、考慮すべき点は少なくない。しかし、岩井宏實が「版本になった多くの図会・図絵・絵図類」と比較しながら、絵馬について「個人であれ、講集団や同業集団など特定の生活集団であれ、願主が直接その生活の場に生き、生業にたずさわってきたものであり、自らの生業の繁栄を祈願したものである。それを描く画家の多くは、願主の身近にいる土地の画家であり、彼らもまたその土地の生活の実情に触れ、自ら体験したことも少なくない。したがって、描かれた図も実景あるいは実情に近いものが多く、民具研究の資料としてその有効性はきわめて高い」と述べるように〔岩井1980〕、カツオ一本釣り絵馬もまた、批判を加えながらも、資料として有効に活用されるべきであろう⁽²⁾。

小稿ではおもに、高知県幡多郡黒潮町上川口に伝わるカツオ一本釣り絵馬を資料として、和船時代のカツオ一本釣り漁の漁場や漁撈具、労働組織、服装、身体技法、そして俗信などについて考察する。



写真1 カツオ一本釣り漁船「龍王丸」
国立歴史民俗博物館蔵

こうした、絵馬にもとづく歴史および民俗の復元作業は、一方で、絵馬という資料の有効性そのものを逆照射することにもなるはずである。

①……………研究史の整理と絵馬の活用

和船によるカツオ一本釣り漁の漁法に関する記録や研究は多くはない。

まとまったものとしては、古くは『日本山海名産図会』が産地や漁期、食べ方、漁法、さらには鰹節の製造方法まで、近世後期の様子を絵とともに伝えている⁽³⁾ [木村 1799]。

また、明治に入ると農商務省水産局によって、漁業振興の目的から全国の漁具漁法の体系化が図られる。その成果が『日本水産捕採誌』である [農商務省水産局 1912]。本書においてカツオは「重要水産物中最高の位置を占むる」とされ、安房の事例を中心としながら漁具や漁法、漁撈組織、餌となるイワシの獲り方などが詳細に記される。本書の編纂は明治 19 (1886) 年に開始され、明治 28 (1895) 年に完成を見る。したがって、その記述内容は和船によるカツオ一本釣り漁の貴重な記録ということができる。

一方、長年カツオ一本釣りにたずさわってきた漁師自身による手記もまた重要な資料となる。とくに明治 45 (1912) 年生まれの西川恵与市の『土佐のかつお一本釣り』は、幼少期に父親から受けた教えや戦前の漁の様子、そして戦後の発展まで、自らの経験を具体的に記している⁽⁴⁾ [西川 1989]。

こうした史料や記録と、自らの調査成果をふまえて、多くの先学がカツオ一本釣り漁の実態解明を試み、成果をあげている。たとえば、高知県中土佐町発行の大著『土佐のカツオ漁業史』は、近世から現代にいたる高知県のカツオ漁業の発展と衰退、技術、民俗、海上での漁師の生活などを詳細に描き出している [『土佐のカツオ漁業史』編纂事務局 2001]。そのなかでも、岡林正十郎による「近代より現代」や坂本正夫による「漁業の民俗」には、和船時代の漁の様子について、具体的には漁具や漁法、漁場、漁撈組織、漁撈慣行、餌の入手と活かし方、漁獲の流通や加工などについての報告や考察が見られる。また、川島秀一の『カツオ漁』は、カツオ一本釣りの道具や技、カツオ船の経営やその組織、船上での生活、漁にまつわる俗信などについて、その歴史をふまえながら報告、考察する [川島 2005]。一方、若林良和の『カツオ一本釣り—黒潮の狩人たちの海上生活誌—』は現代の漁に関する優れたモノグラフである⁽⁵⁾ [若林 1991]。

このように、これまでのカツオ一本釣り漁に関する記録や研究は、数は少ないながらも、その内容は具体的である。しかし、それでも「龍王丸」のような木造和船で行なわれていた漁の様相がイメージしにくい要因は、筆者の想像力の欠如のみにはないであろう。和船時代のカツオ一本釣り漁そのものが研究テーマの中心となってこなかったという印象は否めない。

まずその原因として考えられるのが、和船によるカツオ一本釣り漁が消滅してから久しく、文献による記録も乏しいということである。上記のようにこれまで様々な研究が積み重ねられてきたが、これらの研究で登場するインフォーマントは親の世代が和船で漁をしていた、あるいは自らがごくごく若いときに数年のみ木造和船で漁をしていた、といった人びとがほとんどである。和船時代のカツオ一本釣り漁に関する聞き取り調査が、時すでに遅くしてはじめられたとの感が否めない。

また、一本釣りという独特の漁法が、細部では変化を繰り返しながらも、漁法としては近世から変わらずに続けられてきたということが、研究者の目を和船時代へと向けさせない原因の一つとしてあげられるであろう。たしかに、現代のカツオ一本釣り漁からも和船時代の漁の様子をうかがうことができる。しかし、現代の漁と和船時代の漁とでは、共通点もあれば相違点もあり、当然のことながら現代の漁を中心とした調査・研究が、そのまま和船時代の漁に関する研究とはならない。

そこで、今後活用を検討すべきは絵画史料であり、その鍵となるのが絵馬である。岩井も述べるように、生業に関わる絵馬が「自らの生業の繁栄を祈願したもの」である以上、描かれた内容はその生業にたずさわる奉納者の了解を得たもの、すなわち実景と大きくかけ離れたものではないと理解することができる。つまり、絵馬は絵による同時代の記録なのである。したがって、形式化や誇張、あるいは祝祭的表現などに留意しながら絵馬を積極的に活用していくことが、新たな資料の発見が困難な分野での有効な研究手法となるであろう。

もちろん、これまでのカツオ一本釣り研究においても絵馬は和船時代の漁の様子を視覚的に示す資料として大いに活用されてきた。ただ、それは、あくまでも聞き取りを裏づける補助資料としての活用であったという印象が否めない。つまり、これまでの研究における絵馬に課された役割は「聞き取り内容の担保」であり、「昔はこうだった」という話を、絵馬の中に見出して裏付けるという作業であった。

一方、小稿で試みたいのは、一枚の絵馬そのものから情報を引き出すことで和船時代のカツオ一本釣り漁の実態を明らかにする作業である。一見すると、上であげた「聞き取り内容の担保」との相違が明確でないかもしれない。しかし、筆者が想定しているのは、絵馬から疑問を喚起し、その疑問を文献やインフォーマントの話を参照しながら解決する作業である。とくに絵馬を媒介としたインフォーマントの記憶との接続は有効な手段となり得る。インフォーマントの記憶からはすでに消えてしまった、あるいは記憶の片隅に眠っており容易には言葉となって表れないカツオ一本釣り漁の様子を絵馬のなかに見出し、再び記憶との接合を図るのである。したがって小稿には、カツオ一本釣り漁にたずさわってきたインフォーマントと一緒に絵馬を眺めながら行なった聞き取り調査の成果が含まれている。

②……………近世の土佐カツオ一本釣りと絵馬

(1) 土佐藩の漁業政策とカツオ一本釣り漁

『延喜式』の「主計上」の記述「志摩、相模、安房、紀伊、土佐、日向、豊後貢堅魚及煮堅魚煎汁」からもわかるように、カツオは古代より土佐の産品として知られていた。しかし、土佐のカツオ漁が活発になるのは近世、それも元禄以降のことである。羽原又吉の『日本漁業経済史』を参照しながら、まずは近世土佐藩のカツオ漁に関する歴史を追ってみたい。

慶長8(1603)年の山内氏入国を契機として、土佐藩は水主の保護、そして漁民の育成に力を注ぐようになる。その目的は「前国主長宗我部の遺臣残党の操縦と沿海地住民の安定策であって、それには可及的に前国主時代の社会的慣行乃至規範を存続すると共に、他方において、未開拓の沿海

を開放して新浦新地の創設を奨励して殖産興業の積極的方策を実行する」ことにあった。こうした漁業振興策は奉行職にあった野中兼山による藩政改革によって加速される。万治3（1660）年に出された「広瀬浦掟」では農本主義をうたいながらも「一、むろの火焼船今迄ハ壹艘にて候得共向後貳艘ニ可仕候、其外魚尋船二艘可申付尋魚舟ハ一夜カヘニ船数之内順番可仕、間中ノ網代ニ魚不見候時ハ遠く出方ニ尋、漁可致事」と漁法に関する具体的な指導を行なっている。また「地下人釣漁並山ノ所作仕時候ハ壹人ニ五合ツ、の飯米かし可申候 漁道具網拵苦あみ候時は蔬飯可申付候、並用ニ不立者は勿論蔬飯可申付事」と、働く者には米を貸し与え、働かざる者には質素な食事を命じる姿勢を示して勤労を促している。こうした「極端な干渉保護政策」のもと、明暦期（1655-1658）には土佐西部でのカツオ漁が盛んになり、紀州と土佐の鰹節を中心とした海産物が江戸の市場価格をも左右する存在となる。

その後、寛文3（1663）年に野中兼山が失脚すると、政策は藩主山内忠豊の親政のもとで自由経済へと転換し、元禄期（1688-1704）以降、「新浦創設、新網新獵船の増加のためにあらゆる好条件を与えて、その拡張増加」が図られる。その結果、それまでカツオ漁とその地位を二分してきたクジラ漁の水主の不足をもたらすほどのカツオ漁への労働力の移動が起こっている。これは「鯨漁の労働力と雇傭せられるよりも自主的の鰹漁に従事の方が彼等漁民にとりより一層有利」であったからだといい、カツオ漁の隆盛を示していると言えるだろう。そうした状況は『日本山海名産図会』巻之四に描かれた土佐のカツオ釣りや鰹節製造の様子によくあらわれている（写真2）。

しかし、カツオ漁の隆盛は労働力としての水主の不足をカツオ漁内部でも引き起こす。この傾向は化政期（1804-1829）にかけてさらに深刻化して水主の賃金の高騰を招いている。藩の財政や消費経済への悪影響を恐れた土佐藩は船に乗せる水主の人数制限や水主の賃金の公定などの政策に乗り出し、カツオ漁および鰹節生産の安定化を図っているが、自主的漁業経営・廻船の水主や廻船経営への転業・漁民の商人化といった傾向を止め得ないまま幕末を迎える〔羽原 1954：224-279〕。



写真2 『日本山海名産図会』（寛政11年）
個人蔵

こうした、カツオ漁をめぐる土佐領内における流れは、化政期以降、土佐藩にとっては政策の成功を意味していない。しかし、漁民の側から見れば漁においても、鰹節の生産においても、またその販売においても、藩の意図せざるところで大きな利益がもたらされていたことは確かである⁽⁶⁾。後に取りあげる慶応元（1865）年のカツオ一本釣り絵馬も、藩の思惑をしり目にのびのびと活動していた人びとによって奉納されたものであると考えることができる。

さて、こうしたなかで漁法としてのカツオ一本釣りが成立したのはいつであろうか。

この点について明確に論じたものは管見の限り見当たらないが、先ほども挙げた『日本山海名産図会』に描かれた絵や、釣り方についての解説（後述）がカツオ一本釣りの要件を十分に満たしていることを考えると、本書の発行された寛政11（1799）年段階ですでにこの漁法が確立していたことがうかがえる。また、高知県内では、紀州熊野の甚太郎なる漁師が出漁中に漂流した際に土佐西部の鰹の好漁場を発見し、その後毎年この海域に通漁するようになったという話が残されており、これが土佐カツオ一本釣りの起源であると伝えられている。この話の真偽のほどは不明だが、寛文期（1661-1673）や延宝期（1673-1681）にはすでに紀州漁民の土佐沖への出漁が頻繁に行なわれていたことは疑いがなく「当藩の二大漁業である鯨漁と鰹漁と相前後して基礎づけられた」と考えられる〔羽原 1954：241-248〕。この時期に確立した漁法が具体的にどのようなものであったかは詳らかにできないが、万治3（1660）年の史料に「一、鰹釣候時近辺に不見候時ハ遠く可出、沖ニおみても見えす候はゞ早々帰り陸ニ働可仕事」との記述があることや〔羽原 1954：231〕、「遠海の上に在りて網を用ゆるに便ならざれば各地概ね釣漁を為す」といった漁場環境を考慮すると〔農商務省水産局 1929：155〕⁽⁷⁾、当時紀州からもたらされて土佐で定着した漁法が、魚群を追って沖へと漕ぎ出す現在のカツオ一本釣りにつながるものであったと考えても差し支えないであろう。

（2）近世のカツオ一本釣り漁

それでは、紀州から土佐にもたらされて定着した土佐のカツオ一本釣りはどのようなものだったのであろうか。『日本山海名産図会』の記述にしたがって確認しておきたい。⁽⁸⁾

まず、餌については「鰹の生餌を用ゆる故に先鰹網を引く事も常也鰹二坪許の餌籠に入れて汐潮水に浸し是を又三石許の桶に潮水をたたへて移し入れ十四五石許の釣舟に乗せて一人長柄の杓を以て其汐を汲出せば一人は傍より又汐を汲入れていれかへいれかへて魚の生を保たしむ」という。つまり、カツオ釣りには生きたイワシが必要なため、漁に先立って鰹網を引くこともあり、用意したイワシは餌籠で生かしておき、それを桶に移して船に乗せる。そして、桶の水は1人が海水を汲み出し、1人が海水を汲み入れて常に新鮮を保ち、イワシが死んでしまわないようにするのである。

つぎに漁師と道具については「釣手は一艘に十二人釣さは長一間半糸の長さ一間許ともに常の物よりは太し針の尖にかゝりなし舟に竹簀筵等の波除あり」とあり、12人の釣手が長さがおおよそ2.7m、糸の長さが1.8mの釣竿で釣っていたと記されている。こうした道具は通常よりも太いもので、釣鉤にはかえりと呼ばれる突起がない。また、船には竹などを編んだ波除がつけられているという。竿の長さについては、明治初頭の安房地方の状況を記した『日本水産捕採誌』においては餌釣りの竿が「三尋或は四尋」、つまり4.5mから6m程度で、糸の長さは「『チモト』二尺に三尋餘の緋絲を連続」、すなわち5m程度となっており、『日本山海名産図会』の記述よりもかなり長くなってい

る。これを地域差と解するか時代差と解するか、またはどちらかの記述の間違いと解するかは判断の難しいところである。

さて、具体的な漁法についてはつぎのような記述がみられる。「釣をはじむるに先生たる鰯を多く水上に放てば鯉これに附て踊り集る其中へ針に鰯を尾よりさし群集の中へ投れば乍喰附て暫くも猶予のひまなくひきあげひきあげ一顧に数十尾を獲ること堂に数矢を発つがごとし」。すなわち、釣りははじめるにあたっては、まず大切に生かしていたイワシをたくさん撒いてカツオを引きつけ、そこに尾から鉤を刺したイワシを放つ。するとカツオはつぎからつぎへとこれに食いつくといった具合である。鉤へのイワシの刺し方は尾から刺すとあるが、この点については若干の留保が必要である。西川恵与一によるとイワシの刺し方には5通りがあるという。すなわち、はながけ・せがけ・かまがけ・目刺し・心臓がけである〔西川 1989: 294-296〕。このなかに尾にかけるという方法はない。一方で『日本水産捕採誌』では「鰯の鰓の処より背に向けて刺すを通常とす」としながらも「口より尾に向けて刺すあり背鰭の前より尾に向けて骨に触れざる様筋違に刺すあり頭上を横に刺すあり尾の際に刺すあり多漁の時は目を横に貫きて用ゆることあり」と、安房の事例ではあるが、イワシの尾に鉤を刺す方法を紹介している〔農商務省水産局 1912: 158-159〕。これも地域差と考えるか時代差と考えるかは難しい。

最後に擬餌鉤についても記述がある。「又一法に水浅きところに自然魚の集をみれば鯨の牙或は犢牛の角の空中へ針を通し餌なくしても釣なり是をかけると云生角を用いることは水に入ておのづから先りありていはしの群にもまかへり○又魚を集んと欲する時はおなじく牛角に鶏の羽を加へ水上に振り動かせば光耀尚鰯の大群に似たり」という。餌を追ったカツオがすでに水面近くにわいているときにはクジラや牝牛の骨角で作った擬餌鉤を使い、また、魚を集める際にも牛の角にニワトリの羽をつけた擬餌鉤を使うというのである。近年までさまざまな動物の骨角を材料とした擬餌鉤は使われており、また、現在でも鳥の羽を材料とした擬餌鉤が盛んに使われている〔松田 2012〕（写真 3）。こうした擬餌鉤の技術が 18 世紀末にはすでに成立していたことがうかがえる。

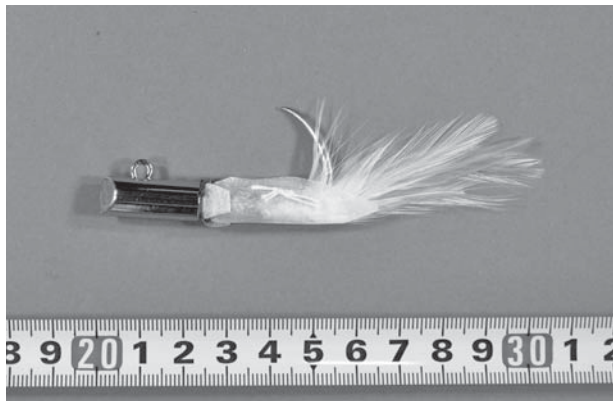


写真 3 現代の擬餌鉤
国立歴史民俗博物館蔵

(3) カツオ一本釣り絵馬の系譜

カツオ一本釣り絵馬とは言うまでもなくカツオ一本釣りの様子を描いて社寺に奉納した絵馬である。管見の限りでは高知県にとくに多く残されており、静岡県や神奈川県など、カツオ一本釣り(10)が行なわれてきた太平洋岸の地域にも確認される。ただ、高知県外で確認されている絵馬の数は少なく、現状では、数が多くまた年代も古い高知県内の絵馬を素材とした比較分析が最も適切であると考えられる。

さて、カツオ一本釣り絵馬の構図は基本的に鰹船を取舵（左舷）から眺め、舳から艫までの船体

すべてが描かれたものである。船上はまさに釣りの真っ最中、空中には釣り上げた鰹が踊っている。海面は鰹の群れで埋め尽くされ、遠くには山がちな陸地と朝日が描かれるのが定型である（写真4・カラー版も参照のこと）。

それでは、このような定型はどういった経緯で形成されたのであろうか。筆者は、近世に流行した船絵馬の影響を考慮すべきだと考えている。

石井謙治によると、船を描いた絵馬は近世初期から見ることができるが、船体を側面から見た、帆走する弁才船が画面一杯に描かれる絵馬の初出は延享2（1745）年のことである。以降、このパターンが船絵馬の主流を占めるようになり、明治に至るまで船絵馬はこの定型に従って描かれていた。船絵馬奉納の隆盛期は天保期（1830-1844）以降とされているが、その背景には弁才船の集散地であった大坂の船絵馬屋の存在があげられる。大坂の船絵馬屋は天明期（1781-1789）から享和期（1801-1804）にはすでに全国的な絵馬の需要を背景に、大きな商いをし

ていたという。一方で、近世前期には土佐の基幹漁業であるクジラ漁やカツオ漁が資本をとおして鯨問屋や鰹節問屋をはじめとする大阪町人と強く結びついていたことにも注目すべきであろう〔羽原1954：212,256〕。つまり、絵馬という大坂の文化が土佐の浦々へと流入する素地は整っていたのである。

さて、船絵馬の船の背後に背景が描かれるようになったのは18世紀中頃からである。宝暦期（1751-1764）から明和期（1764-1772）にかけて、海上守護神として広く信仰を集めていた住吉神社が多く描かれるようになり、天明期以降に定型化されたという。4つの社と太鼓橋、そして高燈籠の3つの要素が松林の中に描かれることによって、住吉神社は弁才船の背景に記号的に配置される。いかにも縁起の良い図柄である（写真5）。

しかし、西洋の画法である遠近法が取り入れられて住吉神社が小さく扱われるようになったと同時に、地元の神社に絵馬を奉納する買い手の希望から、住吉神社を象徴する3つの要素が排され、松林のみを描く絵馬が天保期に増加した。そしてさらに松林のみの背景は、天保初年から徐々に始まる大きな日輪、あるいは水平線上の日の出という背景に取って代わられたという〔石井・安



写真4 カツオ一本釣り絵馬（慶応元年）
上川口天満宮蔵（高知県幡多郡黒潮町）

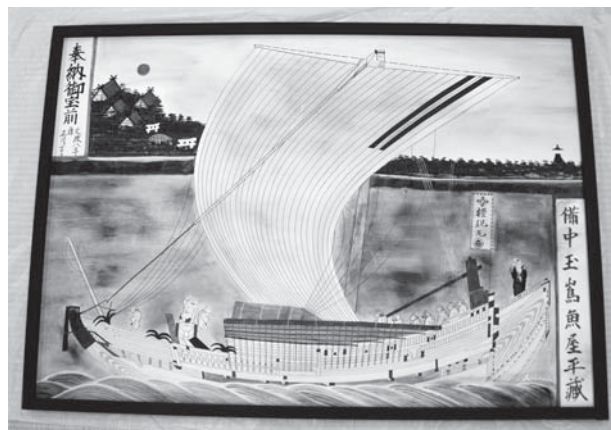


写真5 権現丸絵馬（文政8年）
複製 国立歴史民俗博物館蔵
原品 到道博物館蔵（山形県鶴岡市）

達 2004]。

以上をふまえて、あらためて土佐のカツオー一本釣り絵馬を見てみよう。

漁業にかかわる絵馬にはさまざまな構図が見られる。例えば、カツオ漁に限らず一般的に網漁が描かれる場合には複数の船が協同で漁にあたる絵馬が想像されやすい(写真6)。しかし、土佐のカツオー一本釣り絵馬の場合、管見の限りそのほとんどが、取舵から船体全体を画面一杯に描き、その背景に陸地と太陽、あるいは太陽のみが描かれるという基本的な



写真6 建切網図絵馬(明治40年)

複製 国立歴史民俗博物館蔵
原品 金桜神社蔵(静岡県沼津市)

要素を供えている。高知県内に残る最も古いカツオー一本釣り絵馬は幡多郡黒潮町上川口の天満宮に納められる慶応元(1865)年のものであるが、この絵馬ではすでに定型は整っている(写真4)。

もちろん、カツオー一本釣りは釣り漁であるが故に一艘の船単独で漁が成り立つ上に、土佐のカツオー一本釣りは取舵のみで釣りを行なうため、たまたまカツオー一本釣り絵馬の構図が船絵馬の構図と一致したとも考えられる。しかし、当時の船絵馬の流行や背景の一致などを考慮すると、船絵馬の流行と軌を一にしてカツオー一本釣り絵馬が描かれるようになったと考えるべきであろう。そうであるならば、背景に描かれる陸地についても、それが絵馬の寄進者にとってなじみ深い地元の景観であると同時に、住吉神社が描かれた名残であることも意識されるべきである。この点については後述したい。

また、カツオー一本釣り絵馬のなかには、赤い枠で囲まれ、白く塗りつぶされた上に「奉寄進」あるいは奉納者名などが書かれた部分のあるものも見られる⁽¹¹⁾。これも船絵馬の様式を引き継いだものと考えられる。大坂の絵馬屋は弁才船の絵自体はあらかじめ描いていたものの、注文主の需要に応え、船名や帆の反数、帆印、乗組人数については忠実に描くことに努め、さらに、持ち帰って後に奉納年月日と奉納者名を書き込みやすいように、画面の片側または両側に枠で囲んだ余白を設けたという。このような余白は19世紀初頭には普遍化していたというが[石川・安達2004]、こうした余白について見ても、カツオー一本釣り絵馬が船絵馬の影響下にあることを跡づけている。

③……………絵馬を読む

(1) 黒潮町上川口のカツオー一本釣り絵馬

それでは、絵馬に描かれた和船時代のカツオー一本釣りの様子について具体的に確認していきたい。ここで取り上げるのは(写真4)として紹介してきた幡多郡黒潮町上川口の天満宮に伝わるカツオー一本釣り絵馬である。

この絵馬は縦65cm、横96cmの大きさで、絵の描かれている板は杉材、額の部分も下辺が桧で

あるのを除いて残りは杉材で作られている。絵馬の裏面には「慶応元年丑八月― 上川口浦川〇〇勝魚船乗組」として18人の名前が連ねてあり、最後に「上川口天満宮」と結んでいる。現在確認されているなかでは高知県内最古のカツオ一本釣り絵馬であるが、奇跡的と言って良いほど色の残りが良く、細かい図柄もはっきりと読み取ることができる。画力も巧みであり、躍動感のある人の動きや豊かな表情、細かなカツオの描写などは他の絵馬と比べて抜きん出ている。カツオを釣り上げてひっくり返る人の表現などは大げさなようにも見えるが、カツオ一本釣りを知る人であればそれがあながち嘘でもないことは了解されるであろう。以下の検証によって徐々に明らかとなることではあるが、カツオ一本釣りにたずさわる漁師に見せても実景に近いと判断される絵馬である。

この絵馬については、歴博で新構築された総合展示第4展示室で複製が展示されている。

以下では、おもに複製製作過程で行なわれた絵馬を前にしての聞き取り調査の成果等を活用しながら、絵馬の内容を読み込み、和船時代のカツオ一本釣り漁の様子の復元を試みたい。

(2) 漁場

現在のカツオ一本釣り漁は、南の海で生まれて餌を求めて日本沿岸に回遊してくるカツオの群れを追って、西は琉球諸島や薩南諸島、東は三陸沖、そして南はマリアナ水域までをも漁場としている。こうした広範囲の漁場での操業の背景には、船体や動力の大型化、冷蔵・冷凍技術の改良、通信・航海・漁撈機器の高性能化などがある。しかし、帆と櫓、そして櫓を動力としていた和船の時代には、とくに、釣ったカツオの鮮度を保つことが困難であったため、その操業範囲は限られていた。

弓状に湾曲した土佐湾内では、岬と岬、岬と島などを結んだ直線上を「^{とあ}渡合い」と呼び、この付近がカツオ一本釣りの漁場となっていた[「土佐のカツオ漁業史」編纂事務局2001:298-299]。したがって、漁場は海岸から数kmから十数kmの範囲内ということになる。また、季節によっては沿岸の岩礁にカツオの群れがつくこともあり、ときには小さな湾内にもカツオが入り込んだ。

さて、こうした沿岸での漁で群れを探す場合、もちろん海鳥や漂流物などが目印となる。海鳥はカツオが追い込んだイワシなどを狙う存在であり、漂流物の下にはカツオがつきやすいためである。その一方で、海中にはいくつもの瀬が隠れており、そこに小魚がつき、その小魚をねらってカツオも集まってくる。したがって、和船時代の釣りにおいては、海中の瀬の位置を正確に把握する技が必要であった。その技とは、言うまでもなく山あてであり、船から見える山などの陸地は非常に重要な意味を持っていた。

顔料の剥落が多く見えづらいが、絵馬では右上部に陸地と木が描かれている。これは、前述のように船絵馬の定型に則ったものであり、社や橋、灯籠といった住吉神社を象徴する要素はすでに消滅しているものの、もとは住吉神社の社叢の名残だと考えてよいであろう。前述のように船絵馬の図柄から住吉大社という具体的な要素が捨象され、奉納者名や奉納年月日などを後から記入する余白が確保された背景には、たとえ既成の図柄であったとしても、絵馬の購入者が奉納する土地の風景に図柄を読み替えることを可能にさせるという意図があった。つまり、船絵馬の定型に則って描かれた陸地に特定の地名を想起させるような記号が描かれていないカツオ一本釣り絵馬において、奉納者は自らになじみの深い、あるいは、操業上重要となる陸地に絵馬の陸地を読み替えている可

能性が高いのである。

筆者が行なった聞き取り調査においても、興味深い話が聞かれた。上川口でこの絵馬を見ながら地元の人びとと話をしていたときに、ある漁師が、「この絵馬には東から昇る朝日が描かれているから、手前の陸地が四万十川の河口部の下田のハナで、奥の陸地が足摺だ」と語ってくれたのである。この絵馬の作者は不明であり、また、絵馬の構図は船絵馬の定型を引き継いでいる。したがって、風景の写実性については疑問を抱かざるを得ない。しかし、地元の人びとは絵馬に描かれた風景を身近な風景に読み替え、絵馬への親しみを深めているのである。⁽¹⁴⁾

ちなみに、地元の人びとはこの絵馬に描かれた季節を夏と判断していた。その根拠は衣服が薄着であることにもあるが、もう一つ、寒い時期には黒潮が沖を流れているために、これほど陸地の近くにはカツオが寄ってこないからだという。地元の人びとならではの絵馬の読み方を感じさせられる事例である。

(3) 船

つぎに船に目を向けてみよう。この絵から船の大きさを推測するのは難しいが、14人が乗組んでいることから、8人程度が乗組むという歴博所蔵の「龍王丸」に比べてやや大型の船だと考えられる。水押および船底に施された黒と赤の彩色が鮮やかだが、こうした塗装は他の絵馬に描かれた船でも確認することができる。『日本水産捕採誌』においては「伊勢国度会郡の南部及び志摩国并に紀伊国東西南北牟婁郡」の鰹船の外観の特色が「船の外部に彩色を施し或は赤、緑又は黒色を以て図章を書く」ことにあるとし、土佐でも同様の彩色が施されていることが記されている。さらに、伊豆地方の例ではあるが「船の中棚の方半腹を黒色に髹る是れ船腹白色なるときは魚眼に触れ易きに由り其色を黒くし以て魚をして船に近寄らしめんがため也と云ふ」と、船底の黒は魚の目を欺くためのものだとして報告している〔農商務省水産局 1912：173-174〕。一方で「船底は防腐、防虫のためにのちにはタールを塗るようになっていくが、当時はシダ・ワラ等の火で軽くあぶり、ショウエン（黒色粉末）を菜種油または自家製の鯨油でといて塗布し」、「舳先の部分は青色と黒色に色分けし飾り、青色の部分は銅を巻いたり、ロクショウを卵白と油で溶いて塗ったり、黒色部分は船底と同様にショウエンと油を溶いて塗ったもので、材質の保護に注目しての事であった」との報告もある〔田辺 2001：698〕。ただし、こうした船体への塗装については和船一般にみられることも多く、カツオ漁独自の工夫であるかはさらなる検討が必要であろう。

さて、船の船首付近、船べりから少し下がったところには木の棒が下げられている。これを足台や踏前などと呼ぶ。船上の釣手は船べりに腰掛け、足台で足を踏ん張って重いカツオを釣り上げるのである。一方の船尾付近では台張と呼ばれる板敷がせり出しており、釣手はこの台張りに腰を下ろし、予備の竹竿を足台代わりとしてカツオを釣る。竿が乗せられている木の枝で作られたY字型の船具を上川口ではサマタと呼ぶという。予備の竿は面舵側にも相当数が用意されている。現在の船でも擬餌釣りか餌釣りかといった釣りの種類やカツオの食いの良さなどに応じて長短・硬軟さまざまな竿を釣手ひとりひとりが用意するが（写真7）、竹竿の時代にはとくに折れてしまうことも多く、相当数の予備が必要であったという。船上に無数に描かれた竹竿はこうした実態を反映したものであろう。

つぎに船の中央に目を移してみよう。帆が下され、帆柱がまっすぐに伸びている。カツオ一本釣り漁では現在でも船がカツオの群れに追いつくとエンジンを切り、カツオと一緒に潮に乗って釣りをする。帆を下ろし、櫓を上げている様子からは、そうした釣り方が和船時代から変わらないことが理解される。さらに、帆柱を立てた状態で描くことにはもう一つの意味が読み取れそうである。室戸市においてはカツオが大漁の場合には「水押菰巻、立柱」といって、水押に菰を巻き



写真7 現代のカツオ一本釣り漁船に積まれた釣竿
(宮城県気仙沼市)

つけ、帆柱を立てた状態で沖から帰ってきたものだという。水押に菰を巻くのは「海で魔につかれぬ様にするため」であり、帆柱を立てたままにするのは「柱を倒せぬ程魚を積んでいる」という証しである〔稗田 1936 : 301〕。つまり、帆柱の立つ状態を描くことが縁起の良さを示すことともなっていたのである。一方、船尾にはもう一本細い柱が建てられ、その先には幟がはためいている。この幟の下部には船印が描かれているが、この印をもって奉納者あるいは船を知ることができる⁽¹⁵⁾。

最後に船べりから伸ばされた2本の竿の間に張られた網を確認しよう。これはハリダマなどと呼ばれる網である。「洋上にて鰯の群に逢着したときは餌料に供せんが為め之を捕らんとするに必要欠く可からざるの具」であり〔農商務省水産局 1912 : 172〕、とくに漁場でカツオに追われて海面にわき上がったイワシの群れ、すなわち「えとこをすくいあげ、網のふくらみにいわしを泳がせたまま、はりだまを船にくくりつけておき、その生き餌をかぶしながらカツオを釣った」のである〔坂本 2001 : 514〕。絵馬ではこうした様子が巧みに描かれている。このようなハリダマを用いて餌となる生きたイワシを捕獲する方法がある一方で、『日本山海名産図会』でも紹介されていたように船上に据えられた桶にイワシを活かす方法もあった⁽¹⁶⁾。しかし、高知県内のカツオ一本釣り絵馬でこの桶が描かれているものは少ない。その背景には、ハリダマを使用するような状況がカツオに追い詰められたエトコが大きいことを示しており、つまりはカツオの群れが大きく食欲も旺盛であることを意味するということがあると想像される。こうした事情から、船べりからハリダマを伸ばした図柄がめでたいものとしてカツオ一本釣り絵馬の定型となったと考えられる。

(4) 船上の人びと

まず、人びとの配置について確認したい。土佐のカツオ船では基本的に取舵のみで漁が行なわれることは前述のとおりである。絵馬においてもほとんどの人が左舷を向いている。そのなかで釣りをしている人は船首部分と船尾部分とに分かれており、船のなかほどには餌のイワシを扱う人びとが描かれている。この絵馬では釣りをしている人は白い鉢巻、餌を扱う人は赤い鉢巻という描き分けがされているようである。

現代のカツオ一本釣りでは船尾での釣りが稀になっているようであるが、以前は左舷全体と艀にずらりと人が並んで釣りをしていたという。比較的若い漁師は船首近くに陣取り、ベテランは船尾を占める。その並び順には厳密な序列があり、その序列にしたがって賃金が決まっていた。船首側は艀に近いほど釣り上手であり、艀に陣取るのがヘノリと呼ばれる若手一番の釣手である。絵馬では艀に跨る人物がヘノリである。ヘノリを頂点として左舷を艀に進むにつれて序列は下がる。したがって、ヘノリから数えて4番目の人物が最も未熟な釣手ということになる。絵馬ではこの人物が勢い余ってひっくり返った姿で描かれている。釣り上げたカツオを軽やかに左脇へと納めなければならぬにもかかわらず、このような姿で描かれているのは、絵師がこの人物を意図的に釣り下手として描いたと推察することができる⁽¹⁷⁾。

さて、絵馬ではヘノリの右舷側にも釣手が描かれている。これはヘノリの役を終えた上級者で、ヘノオモカジやオモカジヘノリなどと呼ばれる人である。この位置での釣りは難しい。竿は右手で握るため、船尾方向から食いついたカツオを左脇にまっすぐ取り込むことができず、空中で円を描くようにカツオを操作して左脇に納めなければならないからである。これは船尾右舷側での釣りでも同じである。したがって、右舷に陣取る人は相当の釣上手ということになる。絵馬では右舷で釣る二人がピンと右手を伸ばして釣りをしているが、これを見た現代の漁師はこの動作をまさにカツオを左脇に抱こうとしている瞬間だと読み取った。それは次のような理由による。道糸の長さは竿の長さよりも若干短い。しかし、カツオが釣れると重みで竿がしなるため、腕をぐっと伸ばすとちょうどカツオが胸の高さに飛び込んでくるというのである。こうした解釈の当否の判断は難しいが、絵馬が記憶と発想を喚起する力の大きさを示す好例であろう。

さて、この絵馬で餌を扱う漁師は中央に3人描かれている。左から順番に、ハリダマからナゲダマで餌のイワシを掬おうとしている人、その隣で左手にナゲダマを持ち、右手でイワシを投げようとしている（あるいは投げている）人、そしてやや右に離れて帆柱のそばで隣の漁師に右手を突きだしている人の3人である。

まず、左の2人は餌を投げる役目の漁師、すなわちエサナゲである。船が大きくなった現在では、体力的に余裕のある若手がエサナゲを務めることもあるというが、もともとは目配りの利くベテランの仕事であった。エサナゲの技術の重要性について西川恵与市は「餌飼えの力量は釣りはじめてから発揮される。それは、釣り手の繰り出す竿の先へ万遍なく餌いわしが落下するように投げこんでやるのである。二、三人の釣り手の前だけに魚が集まってはこまる。全員の釣り手の前に、次から次に魚が押し寄せてくるように撒くのである。魚の動き、釣り手の動きを注意深く見ていて、群を船から離さないようにするのである」と述べているが〔西川 1989：292-293〕、その役割の重要性は絵馬の時代においても変わらぬはずである。

一方、餌を扱う人物のなかで、右手を突き出す3人目の動作が不思議に思われるかもしれない（写真8）。赤外線写真で確認するとこの人物の右手には小さな桶のようなものが描かれていることが分かる。これは各漁師に餌を配るためのエバチだと考えられる。『日本山海名産図会』にも記されていたように、近世にはすでに擬餌鉤を使った釣りが行なわれていたが、主流は餌釣りだったようである。したがって、生きた餌を各釣り手の元に配らなければならない。その際に使われたのがエバチと呼ばれる小型の桶である⁽¹⁸⁾。このエバチを配る作業はカシキまたはカシキをあがってすぐの若

い漁師の役割であったという。

つぎに船上の人びとの服装に注目してみたい。中央の3人、すなわちエサナゲと餌配りについては褌に鉢巻という姿だが、釣りをする人びとは濃紺の袴纏のようなものを着ていることが見て取れる。これは上川口ではカツオダキと呼ばれるカツオ漁専用の着物である⁽¹⁹⁾。カツオを釣る際には絵馬にも描かれているように左脇にカツオを抱きかかえて鉤を外す。しかし、カツオは地肌で抱くとウルシに触



写真8 エバチを持つ人物（一番左）

れたときのようにかぶれるといい、また、カツオが暴れた際には肌がこすれたりヒレが刺さったりする。したがって、カツオ一本釣り漁にカツオダキは欠かせない。他のカツオ一本釣り絵馬を見ても、そのほとんどにおいて着物を着て釣りをする人と、裸で餌を扱う人が描き分けられている。しかし、その機能だけを考えれば、基本的には左脇のみが保護されていればよく、はじめから右袖のないカツオダキを作ることもあったという。上川口の絵馬では面舵で釣りをする2人が右半身を肌蹴ているが、左舷での釣りとは違い、右腕を大きく動かしながら行なう右舷での釣りにおいてはとくにその機能性を追及する実態が描かれていると同時に、釣り上手の自信と心意気をも感じさせられる。

褌に目を移してみよう⁽²⁰⁾。絵馬に描かれた14人の漁師のなかで褌の見えるのが10人、このうち6人が赤い褌を、4人が白い褌をしめている。このうち、赤い褌についてはこれまでの報告でも「下ばきには六尺褌を締める。既婚者は白、未婚者は赤であった」という高知県下の報告があるほか〔西川1989：78〕、「カシキの鉢巻は多くは赤で褌も同様であった。さもないとカシキの鉢巻は何処かの祝に貰った手拭が用いられたものだった。主に鯉を呼ぶのはカシキだから赤が用いられるのだが、これは赤い鯉が来るようにとの意味で、鯉が多く寄って来ると、遠くからは海の水が何となく赤みを帯びて見える。斯く漁に当る様にとの縁起で祝いに赤を用いるのである」といった報告もある〔岩崎1991：133〕。カシキ、つまり乗組員の最も若い者が縁起をかついで赤い鉢巻と褌を着用するというのである。こうした説にしたがって、上川口の絵馬に関しても「赤いフンドシは独身男性で、白いフンドシは既婚者」という解釈がなされている〔林2005：74〕。

こうした若者や未婚者が赤褌をしめるという報告がある一方で、上川口での聞き取り調査では別の話を聞くことができた。すなわち、昔は年齢や未婚か否かにかかわらず、多くの漁師が赤褌をしめていたというのである。それは、海に落ちたときに赤い褌を伸ばして海中にはためかせるとサメが近寄らないと考えられていたからである。高岡郡中土佐町久礼でも、赤褌とは限らないが、褌を海中で伸ばせばサメ除けになるという話が聞かれる。また、遠く離れた岩手県上閉伊郡遠野町地方では「山で狼に逢ったら、褌の前の垂れで目を三度こするとよい」とされたといい〔民俗学研究所1955a：110〕、褌自体に危険を避ける特別な力が具わっているという考え方があるようにも思える。

さらに赤という色が有する特別な力にも注目すべきであろう。土佐清水市中浜では出港の際にア

ミハリとヘノリの妻が「赤い腰巻を竿につけて、大きく左右に振って見送る風景」が見られたという〔西川 1989：30〕。また、三重県度会郡南伊勢町礪浦においては漁師の間で「赤い細紐を持って乗船すると漁に当たるともいわれ、港々からの出港前に、女郎さんに作ってもらった」という〔川島 2005：308〕。これらは赤という色と女性とが結びついた際に、航海安全や豊漁がもたらされるという考え方を示すものであろう。また、赤をもって神に感謝を示すということも行なわれている。「鹿児島県枕崎のカツオ船では、大漁をすると、昔は船頭が女物の赤い着物を着て、お神酒を持って枕崎神社へ参詣に行った」という〔川島 2005：263〕。静岡県焼津市では正月の元旦に船名を染めた赤い幟を担いで焼津神社に参拝する幟祭り行なわれ、大漁の際にもこの幟が船に掲げられるといい〔沼津市史編さん委員会 2007〕、同じく沼津市の大瀬神社の祭りには、大漁旗とともに「赤い布旗をカラカイ（艫にある短い柱）に赤糸でもって結びつけ」た船でお参りし、新しい赤旗と前年に借りた赤旗を納め、この一年で漁の良かった船が奉納した赤旗を借り受けて帰るという〔静岡県 1993〕。さらに、千葉県匝瑳郡では漁獲が格別多いときに網主が「万祝へ」と称して揃いの衣服を漁夫に配布し、それに対して漁夫は「之を祝する為め裸体赤禪にて鎮守に参拝し大漁を奉謝」したという〔千葉県匝瑳郡教育会 1921：107〕。

禪や赤という色が持つ特別な力についてはさらなる考察が必要であるが、ベテランであるはずの餌投げが赤禪をしめているという状況を考慮すると、この絵馬における赤禪は未婚者のみが着用するものではなく、航海中の安全や豊漁を祈って多くの漁師が着用したものであると理解しておきたい。

おわりに

以上、カツオ一本釣り漁の歴史的背景について土佐藩の政策という側面からふまえたうえで、カツオ一本釣り絵馬の成立についての見解を示し、さらに慶応元（1865）年の絵馬から読み取ることのできる和船時代のカツオ一本釣り漁の技術や俗信などの諸相を明らかにした。もちろん、一枚の絵馬という限られた資料からの考察であるため、当時の漁の全体像を示すという成果に至るものではない。しかし、描かれた景観に関する地元の人びとによる認識や漁師の技法、あるいは服装など、文献調査やインタビュー調査による成果から一歩踏み出す成果も上げ得たと考えている。これは、絵馬を「聞き取り内容の担保」として使うのではなく、絵馬そのものを読み込むことによって発想を得、さらにインフォーマントの語りを喚起するという方法の有効性を示すものであろう。また同時に、こうした成果は絵馬そのものの史料としての価値を裏づけるものであることも記しておきたい。

註

- | | |
|---|---|
| <p>（1）——コジョクとは近世の文献に記されている小型の漁船「小職船」のことだと考えられる。</p> <p>（2）——川島秀一もまた、鰹一本釣り絵馬から「現代のカツオ一本釣り漁の民俗にも通じるような表現を読み取ること」は「可能」であり、絵馬は「カツオ漁の民俗を</p> | <p>知るに一級の資料」であると指摘している〔川島 2008〕。</p> <p>（3）——本書の記述には『本朝食鑑』（元禄 8（1695）年 人見必大）との共通点も多く、当該書を参照していることがうかがわれる。</p> |
|---|---|

(4)——その他〔植杉2002〕なども挙げられる。

(5)——その他『焼津市史 漁業編』〔焼津市史編さん委員会2005〕や『焼津市史 民俗編』〔焼津市史編さん委員会2007〕には、カツオ漁の制度や経営組織、信仰などについての詳細な報告と分析がみられる。ただし、漁法についての記述は多くない。

(6)——このころには藩の目をかいくぐった鰹節の「抜け売り隠し買」も横行していたという。

(7)——ただし、「鰹網」という記述は寛政7(1795)年の史料にも見出すことができ、一概に釣漁だけが行なわれていたと言い切ることはできない。

(8)——『日本山海名産図会』に記された内容は、千葉徳爾が「この人の説くところには空想的な解釈とか論理の飛躍が少なく、これまでの学説とことさらに異を立てて争うといった着想にとぼしいのですが。常識的、感覚的な日本人には珍しく、堅実で実証的な学問態度があらわれている」と述べるように〔千葉1970:292〕、当時の著作物としてはかなり高い信頼性を持つものと理解できる。

(9)——12人という人数については若干の付言が必要であろう。文化6(1809)年の史料において、労働力不足が原因で1艘に水主は17人までと定められていることを考慮すると〔羽原1954:269〕、その10年前である本書出版時には17人より多くの水主が乗り込む船も多かったと推察される。したがって、本書で取りあげられたのは小型あるいは人手の足りていない船と考えることもできる。

(10)——静岡県では沼津市西浦江梨の大瀬神社に年代不詳のカツオ一本釣り絵馬が残されている〔沼津市歴史民俗資料館2002:26〕。また、神奈川県大磯町西小磯の宇賀神社には大正9(1920)年奉納のカツオ一本釣り絵馬が残されているが、これは「2隻の船がカツオの魚群を追いかけ、釣り上げている絵馬」であるという〔平塚市博物館1993:31〕。

(11)——四万十市下田の貴船神社蔵の明治16(1883)年の絵馬や、高岡郡中土佐町久礼港山の住吉神社の絵馬(年不詳)に確認される。

(12)——〔林2005:74〕では「上川口浦川徳屋 勝亟船乗組」と翻刻している。しかし、筆者には「徳」「屋」の文字が同定しにくかったため、慎重を期して字を伏せた。また、「亟」の字については文意から考え「魚」と

読むのが妥当であると判断した。

(13)——現在は高知沖などに設置された浮漁礁での日帰りの沿岸漁業も盛んに行なわれている。

(14)——高岡郡中土佐町矢井賀の絵馬に描かれた岩壁について、地元ではこれが豊漁や航海安全の祈願のために竜宮様が祀られる土佐清水市の臼碇であると語られているという〔川島2008:22〕。

(15)——ただ、現在ではこの船印がどの家の船のものであったのかは不明である。

(16)——註10で紹介した沼津市西浦江梨の大瀬神社の絵馬には桶が描かれている。

(17)——カツオは鉤にかかってもあまり動き回らないため、釣り上げる際にかえって重く感じるという。したがって勢いよく釣り上げる必要があるが、釣り方の下手な人はカツオを思いがけない方に飛ばしてしまうという。絵馬に描かれたひっくり返る人物は、そのような状況として描かれたようにも思われる。

(18)——大正時代の宮城県気仙沼市では直径が1尺6寸または1尺1寸、高さが5寸5分または4寸5分であったというが〔川島2005:54〕、この絵馬から近世土佐のエバチの大きさを推定するのは難しい。

(19)——高知県土佐清水市中浜では木綿織の冲着物をドンザと呼び、冬と春は長ドンザ、夏は短いドンザを着ていたという〔西川1989:78〕。また、高知県幡多郡ではカツオ釣りの際に着られる腰切の短いドンザをハンコドンザと呼び、「浅黄縦縞のあつし仕立て。襟は羽織のように返して紐で結ぶ。紐は必ず青苧を用いた」という〔民俗学研究所1955:1279〕。ドンザとは襦袢やそれを刺したもの、袴纏、襦袢などを指す言葉だが、とくに滋賀県や和歌山県では「多くは漁業用の潮除け雨除け寒さ除け」の綿入だという〔民俗学研究所1955:1079〕。高知県下のカツオ一本釣り漁で用いられていたのもこうしたものであろう。

(20)——この褌は竿あてあるいは帆前だれなどと呼ばれる布のようにも見える。これは着物の上から着用して竿の当たる部分を保護するものであるが、絵馬を見る限り着物の上からの着用は確認できず、また、竿あてをする必要がない餌投げの赤褌との描き分けも見受けられない。したがって筆者はこれを褌と判断した。タケジリマエカケ(竹尻前掛け)と呼ばれる静岡県焼津市の漁師が使った竿あてについては〔荻野2011〕が報告している。

参考文献

- 石井謙治 1995『和船Ⅰ』ものと人間の文化史 76-Ⅰ, 法政大学出版局
- 石井謙治・安達裕之 2004『船絵馬入門』船の科学館叢書 4, 船の科学館
- 岩井宏實 1980「民具研究と絵馬」(日本民具学会『民具研究』30)
- 岩崎敏夫 1991『村の生活 聞き書』岩崎敏夫著作集 4, 名著出版
- 上杉豊 2002『漁師という生き方』廣済堂出版
- 岡林正十郎 2001「近代より現代」(『土佐のカツオ漁業史』編纂事務局 2001『土佐のカツオ漁業史』高知県中土佐町)
- 荻野裕子 2011「焼津カツオ漁師が奉納した網かけ取緒」(日本民具学会『民具研究』144)
- 川島秀一 2005『カツオ漁』ものと人間の文化史 127, 法政大学出版局
- 2008「絵馬とカツオ漁―描かれた土佐カツオ一本釣り漁の民俗―」(『鰹―カツオと土佐人―展示解説図録』高知県立歴史民俗資料館)
- 木村孔恭 1799『日本山海名産図会』(名著研究会 1975『日本名所図会全集 日本山海名産図会全 日本山海名物図会全』名著普及会)
- 高知県立歴史民俗資料館編 2008『鰹―カツオと土佐人―展示解説図録』
- 高知市立自由民権記念館 1992『絵馬―土佐の歴史とくらし―』企画展「絵馬にみる土佐の歴史とくらし展」展示図録
- 高知新聞社 2009『漁の誌―高知の漁業最前線―』高知新聞社
- 坂本正夫 2001「漁業の民俗」(『土佐のカツオ漁業史』編纂事務局 2001『土佐のカツオ漁業史』高知県中土佐町)
- 桜田勝徳 1936「土佐漁村民俗雑記」(桜田勝徳 1980『桜田勝徳著作集』1 漁村民俗誌, 名著出版)
- 静岡県 1993『静岡県史』資料編 24 民俗二
- 高桑守 1985「土佐カツオ船復元始末」(国立歴史民俗博物館『歴博』13)
- 田辺寿男 2001「土佐の和船」(『土佐のカツオ漁業史』編纂事務局『土佐のカツオ漁業史』高知県中土佐町)
- 千葉徳爾 1970「解題」(千葉徳爾註解説 1970『日本山海名産名物図会』社会思想社)
- 「土佐のカツオ漁業史」編纂事務局 2001『土佐のカツオ漁業史』高知県中土佐町
- 西川恵与市(加藤雅毅編) 1989『土佐のかつお一本釣り』平凡社
- 沼津市歴史民俗資料館 2002『企画展 漁村の絵馬』
- 農商務省水産局 1912『日本水産捕採誌 全』水産社
- 羽原又吉 1954『日本漁業経済史』中巻 2, 岩波書店
- 林勇作編 2005『中土佐の絵馬』中土佐町教育委員会
- 平尾道雄 1955『土佐藩漁業経済史』市民叢書 4, 高知市立市民図書館
- 平塚市博物館 1993『絵馬を読む―南相模の絵馬―』
- 広谷喜十郎 1992「土佐の漁業と紀州漁民」(森浩一編 1992『伊勢と熊野の海』海と列島文化 8, 小学館)
- 松田睦彦 2012「カツオ一本釣り用疑似鈎」(国立歴史民俗博物館『歴博』172)
- 宮下章 2000『鰹節』ものと人間の文化史 97, 法政大学出版局
- 民俗学研究所(柳田国男監修) 1955a『改訂総合日本民俗語彙』1, 平凡社
- 1955b『改訂総合日本民俗語彙』3, 平凡社
- 焼津市史編さん委員会 2005『焼津市史 漁業編』焼津市
- 2007『焼津市史 民俗編』焼津市
- 若林良和 1991『カツオ一本釣り―黒潮の狩人たちの海上生活誌―』中公新書 1021, 中央公論社

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2013 年 3 月 25 日受付, 2013 年 7 月 30 日審査終了)

Analysis of Votive Pictures : A Study of Pole-and-line Bonito Fishing in Tosa in the Period of Japanese-style Wooden Vessels

MATSUDA Mutsuhiko

This paper aims to reveal the actual situation of pole-and-line bonito fishing in the period of Japanese-style wooden vessels by analyzing “Katsuo Ippon-zuri Ema,” votive pictures of pole-and-line bonito fishing dedicated to temples and shrines. Image materials play an important role when written materials and interview surveys have limits to what they can discover. Especially, votive pictures concerning occupations are considered likely to reflect actual situations and conditions since they were dedicated by those involved in the occupations in hopes of their prosperity. Therefore, these votive pictures should be positively used in research while taking into consideration the possibility of formalization, exaggeration, and festive expression.

In Kochi, compared to other prefectures, more votive pictures of pole-and-line bonito fishing remain. These pictures are considered to have originated from Osaka, with which Kochi had built strong economic ties through distribution of dried bonito against a background of the growth of pole-and-line bonito fishing in the early modern times supported by the fishery policies of the Tosa domain (the government of Kochi). The evidence can be found in the design of votive pictures of pole-and-line bonito fishing which is similar to that of votive pictures of vessels produced and sold mainly in Osaka.

This article uses the votive picture of pole-and-line bonito fishing offered to Tenmangu Shrine in Kamikawaguchi, Kuroshio-cho, Hata-gun, Kochi Prefecture, in 1865, not as support for information gathered by interview surveys, but as primary materials to investigate pole-and-line bonito fishing in the period of Japanese-style wooden vessels, including fishing places, fishing tools, working organizations, attires, physical techniques, and folk beliefs. Although the scope of discovery does not significantly extend the information in the picture, the result breaks new ground beyond conventional surveys centered on documentary and interview studies and reveals the understanding of local people about the scene in the picture as well as fishing techniques and attires. These outcomes also prove the worthiness of votive pictures as historical materials.

Keywords: Votive pictures, pole-and-line bonito fishing, Japanese-style wooden vessels



写真4 カツオー本釣り絵馬（慶応元年） 上川口天満宮蔵（高知県幡多郡黒潮町）